

おとくさん

花の山



登場人物

ナレーター

おとく

茂助
もすけ

母
はは

お坊さん
ぼっ

村人1
むらびと

村人2
むらびと

村人3
むらびと

村人4
むらびと

1



2



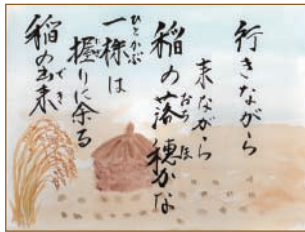
3



4



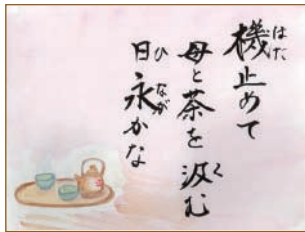
5



6



7



8



9



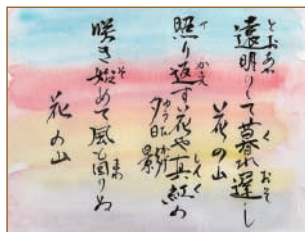
10



11



12



13





ナレーター

座間の谷戸山は、かつて座間の秘境といわれた所で、深い森はひっそりと静まり返り、訪れる人もなく、長い間、昔のままの姿をとどめておりました。

江戸のおわり、この辺りの生まれで、江戸のお屋敷に奉公に出ていた茂助という若者が、むすめを伴って帰ってきました。

「おい、聞いたか、谷戸の茂助がお江戸の武家のむすめっこ連れてけえってきたとよ。」

村人1

村人2

「それにしても気の毒だなあ、けえってきたものの、住むところがねえだんべ。」

村人3

「何とかなんねえかね。」

ナレーター

近所の人たちが気をもんで話し合っていました。娘の名はおとくといひ、茂助の奉公先の主の娘でした。茂助の親類が相談して、今は使われていない物置小屋に手を入れて、二人が住めるようにしてやりました。

村人1

「ようけえってきたな、茂助。」

村人2

「おらんとおころの田んぼをかしてやあるべ。十分ちゆうわけにはい



かねえけんだよ。」

ナレーター

夫婦ふうふとなった茂助とおとくは、谷戸山やとやまのふもとの家で暮くらすようになりまりました。ところが百姓ひやくしやうの仕事しごとは、おとくととって何から何まで初めての仕事ばかりでした。朝あさ早くから夕方おそ遅くまで、二人は一生いっしやう懸命けんめい働はたらきました。すぐには暮くらして行くだけの収穫しゆつかくは望のぞめません。「おとく、苦くろうかけてすまないなあ。どうだろう、江戸えどで覚おぼえた飴あめをつくって売うりに行くというのは。」

茂助

おとく

「お前まへさまの思いどおりにしてください。わたしにも何かできることがあればいいのですが……。」

ナレーター

茂助もすけは飴あめをつくり、菓子問屋かしどんやに卸おろしたり、自分でも売うり歩あるきました。一方、おとくは、あることを思おもいついて、

おとく

「お前まへさま、ご近所きんじよの娘むすめさんに、行儀作法ぎやうぎさほうなどを教おしえてあげるといふのはどうでしょうか。」

茂助

ナレーター

「そりゃあいい、さっそく親類しんるいに声をかけてみることにしよう。」
こうして、おとくは、行儀作法ぎやうぎさほうを教おしえることにしました。すると、近所きんじよの娘むすめたちばかりか、近郷きんきやうからも習まないに通かつてくるようになりま

した。喜んだ娘の親たちは、

村 人 4

「おらの家の畑で取れたもんで珍しくもねえけんど、食べてくれな。」

ナレーター

と違って、取れたての野菜などを、おとくの家に届けてくれるのでした。こうして、おとくは百姓の暮らしになじむように一生懸命励みました。

季節は移り、田植えのころになりました。生まれて初めてのことで、どうしても泥の田んぼに入れないおとくを見て、おっかさんがいいました。

母

「おとく、わしらが食べてるおまんまは、百姓が丹精こめてつくつたものじゃ。田植えして、水の見回りから草取りやら、嵐で稲が倒れねえかと、おちおち眠れねえこともある。刈り取るまで気の抜けねえものだ。八十八の手間がかかるから、米っていうだ。おら、学問はねえが、それくれえは知ってるだ。」

ナレーター

これを聞いたおとくは

おとく

「おっかさん、申し訳ありませんでした。」



ナレーター
と心からわびるのでした。それからのおとくは、田んぼの稲の育ちそだ

具合ぐあいに気を配くばるようになりました。

やがて、実りの秋を迎えました。

丹精たんせいこめたおとくの家の田んぼは、見事みごとにたれた稲の穂が、金色の波を打っているようでした。

茂助

「おとくのお陰で良い出来だ。心配してくれた親類しんるいも、近所きんじよの人も、喜んでくれるじやろうて。」

ナレーター

茂助のうれしそうな顔を見ていたおとくは、娘のころからたしなみとして、折りにふれ作っていた俳句はいくがふとうかんできました。

おとく

一株いちきは握りに余る稲の出来

ナレーター

しかし、おとくは口には出しませんでした。何故なぜなら、当時は草深

い田舎いなかでは、女の身で俳句や川柳せんりゅうなどをつくる人はいない時代だったからです。おとくは刈り取った後に落ちている稲の穂を拾いなが

ら、一粒も無駄むだには出来ない、と思うのでした。

おとく

行きながら来ながら稲の落ち穂かな

ナレーター

秋の取り入れが済むと、百姓仕事も一段落になります。それでも家



母

の中での仕事は、途切れることはありません。おとくは、おつかさんから機織りを教わり、冬の間、せつせと機織りに精を出していました。そんなおとくに、おつかさんは、

「おとくや、そんなに根詰めてやらずともええ。ひと休みして、お茶でも入れておくれ。」

ナレーター

おとくは機織りをやめて、おつかさんと並んでお茶を飲みながら、おだやかなひと時を過ごしました。

おとく

機止めて母と茶を汲む日永かな

ナレーター

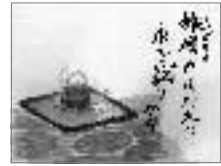
冬の間、訪れる人もない谷戸山のふもとにも、時には、旅の坊さんが立ち寄ることもありました。坊さんは、おとくの家へ寄っては、旅の話をしてくれるのでした。

坊さん

「茂助さん、おとくさん、ご夫婦仲良く仕事に精を出しておられる姿を、本堂山の観音様がお守りくださっておられるのじゃ、毎日、手を合わせて拝みなされよ。」

ナレーター

傍らでワラ仕事をしている茂助まで話に引き込まれる様子を匂にしました。



おとく

ナレーター

旅僧たびそうのほだ火なに永ながき談かたりかな

寒い冬が過ぎて、春の気配けはいが感じられるようになりました。山のあちこちで鶯うぐいすが鳴き始め、めったに人の踏み込まない山の奥のわき水の音が聞こえてくると、それまで眠っていたような花が一斉に咲き出しました。

おとくは山の道に分け入って、足元にさく花を見つけると、心がうきうきしてくるのです。

ヤマブキが咲き、十二ひとえや、一輪草、二輪草、かわいらしい蛍ぶくろなどの花を見ると、

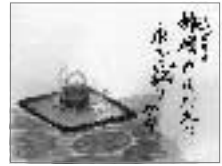
おとく
「まるで花が喜んでいようねえ。おつかさん、この黄色の花は、何という花ですか。」

母

「ああ、これは金らんじゃ。ほら、こっちの白い方は銀らんじゃ。」
「色とりどりの花が咲いて、ここは、まるで花の山ですね。」

ナレーター

貧しくてきびしい暮らしの中であっても、花になぐさめられるおとくでした。谷戸山の田植たうえがすんだ田んぼでは、かえるが賑にぎやかに鳴き蛍が飛び交い、見あきることがありません。



おとく

ナレーター

旅僧たびそうのほだ火なに永ながき談かたりかな

寒い冬が過ぎて、春の気配けはいが感じられるようになりました。山のあちこちで鶯うぐいすが鳴き始め、めったに人の踏み込まない山の奥のわき水の音が聞こえてくると、それまで眠っていたような花が一斉に咲き出しました。

おとくは山の道に分け入って、足元にさく花を見つけると、心がうきうきしてくるのです。

ヤマブキが咲き、十二ひとえや、一輪草、二輪草、かわいらしい蛍ぶくろなどの花を見ると、

おとく
「まるで花が喜んでいようねえ。おつかさん、この黄色の花は、何という花ですか。」

母

「ああ、これは金らんじゃ。ほら、こっちの白い方は銀らんじゃ。」
「色とりどりの花が咲いて、ここは、まるで花の山ですね。」

ナレーター

貧しくてきびしい暮らしの中であっても、花になぐさめられるおとくでした。谷戸山の田植たうえがすんだ田んぼでは、かえるが賑にぎやかに鳴き蛍が飛び交い、見あきることがありません。



初めてこの地に来てから、十四、五年が過ぎていました。

ようやく暮らしにも、おとくの心にも、ゆとりが持てるようになっていました。

おとくは、これまでの暮らしの中のことや、感心したことを、まるでわき出るように俳句に詠んでいきました。

おとく

遠明かりして暮れ遅し花の山

照り返す花や真紅の夕日影

咲き初めて風も回りぬ花の山

ナレーター

江戸の武家に育ったおとくの俳号は雪花女せつかじよといました。

おとくが波乱に満ちた一生を終えたのは六十五歳の時でした

ナレーター

谷戸山やとやまが人々に知られるようになったのは一九九三年、県立谷戸山公園として整備せいびされたからのことです。頂上ちやうじやうから眺めると目の前に大山を望むことができます。おとくさんを感じかんどうさせた谷戸山に、心あたたまる懐かしい風景との出会いを求めて、今は大勢の人々が訪れ、楽しんでいきます。

別
記

おとくの作った俳句は星の谷月星堂げっしやうどう庭風喜寿の祝いや、
祝賀句集や、円教寺奉額句集、鈴鹿明神社祭礼集などに
出したものが残されています。